

怪談物件マヨイガ2

蒼月海里

第四回

九重の傷

九重と八坂が対峙した後、榊は九重とまともに口を利けずに別れた。

八坂が言っていた、妹を手にかけてとはどういうことか。九重に妹がいたことも初耳だったが、手にかけてというのは聞き捨てならない。

八坂と会った後、九重は明らかに、榊に対して壁を作っていた。プライベートなことだからと自分で解決すると言わんばかりだ。榊は壁の向こうに踏み込みたかったが、結局、その勇気が出なかった。下手に触れたら、九重の傷を広げてしまうかもしれない。

九重を気遣ったことだったが、その実は、怖かったのかもしれない。

(僕が踏み込むことで、もっと厚い壁を作られてしまうかもしれない。そんな恐れが、僕を躊躇させたんだ)

九重は苦悩しているようだった。もしかしたら、その孤独な戦い

に力添えが出来たかもしれないのに。

榊は、保身に走ってしまったのである。

「はあ……」

どんよりと曇る空の下、重い溜息ためいきが零れた。

榊は、西新宿にしんじゅくにある九重の事務所の近くまで来ていた。

今日は会社の休日だ。不動産屋の榊ではなく、ただの榊としてやって来た。

「どんな顔をして会えばいいんだ」

手土産てみやげのお菓子はあるものの、九重の気分がそんなもので晴れるとは思えない。

九重の事務所は、西新宿の外れにある雑居ビルの一室であった。

人通りが少ない道に面しており、手入れをされているとは思えな

い植木の間を縫つなっていくと、半地下に繋がる階段が目に入る。

その先に、事務所の入り口があった。

「今日はいるか」

以前は、九重が留守の時に来訪してしまった。だが、今日は少し早い時間にやって来たし、九重が仕事に出る前かもしれない。

そんな気持ちで階段を下り、背筋を伸ばしてインターホンを鳴らしてみたが、反応はなかった。

「九重さん」

念のためノックをして呼んでみるものの、誰かが出てくる気配はない。聞き耳を立ててみるものの、物音どころか人の気配を感じられなかった。

「また留守かな……」

九重のことだから鍵を開けっぱなしにしているのだろうが、菓子折りだけ置いて帰っても意味がない。かといって、九重が帰ってくるまで勝手に事務所で待たせてもらうのも気が引けた。

「でも、ビル内にはいるかも」

榊はハッと思い出す。

事務所には、二つの出入り口があった。外に面した扉の他に、ビル内に繋がっていると思しき扉があったのではないか。

ビル内にも九重のように商売を営んでいる者がいるようだし、ビル内で買い物でもしているかもしれない。

そう思った榊は、気づいた時にはビルの別の入り口を探していた。

「あつた……」

がらんとした入り口が、ぽっかりと空虚な口を開けていた。

上階は居住エリアになっているようだが、固く閉ざされて錆びついた扉が外廊下に沿って並んでいるだけで、人の姿が見当たらない。入り口も埃が^{ほこり}あちらこちらに舞っていて、人が出入りしているとは思えない様子だった。

先日、九重と一緒に行った『幽霊マンション』よりも、よっぽど何かが出そうである。

「いや、むしろ逆か……」

幽霊すら出なさそうだと、榊は思った。

遙か昔に住民が去り、人々の記憶からも忘れ去られようとしている、がらんどうな廃墟のようだ。

中に一步踏み入れると、どんよりとした空気が榊にまとわりついた。

ビルの中は異様に暗い。入り口と窓から零れる外界の光がうすぼんやりと辺りを照らしているだけだった。

天井に照明はあるものの、蛍光灯の寿命はとうの昔に尽きていて、無数の白糸に巻かれる蜘蛛の住処と化していた。土埃で汚れた窓枠には、翅を食い破られた蛾の死体が幾つか転がっている。

死の気配が、異様に濃い。

耳が痛くなるほどの静寂に襲われた榊は、足音を立てることすら躊躇ってしまう。

一階にも、ちらほらと店舗らしきものはあった。

しかし、今はどれもシャッターが閉まっており、色あせて読めない看板が虚しく並んでいるだけだった。その一角には廃材が積み上げられていて、ゴミ溜めのようになっていた。

人の生命活動が停止すると、死ぬというのが一般的な認識だ。

しかし、本人が死んだ後にも思い出す者がいれば、彼らの中で死者は生き続けているのだろう。忘れ去られた時が、本当の死なのだ。

そういう死が、このビルの中に充満しているように思えた。

濃厚な死の気配を拭い^{ぬぐ}つつ、榊は一階の奥へと進む。すると、床に闇^{やみ}が唐突に拡がっていた。

下り階段だ。明かりが差し込まないせいで、数段先も見通せない。

「本当に事務所へ繋がっているのかな……」

むしろ、冥府^{めいふ}まで繋がっていきそうだ。

イザナギやオルフェウスは愛しいひとのために冥府まで降りていったが、榊に彼らのようなモチベーションはなかった。

「また、目を改めようか……」

榊は踵^{かかと}を返そうとする。しかし、身体が動かなかった。

(でも、僕は九重さんのことを知りたい。彼が一人で苦しんでいるのなら、支えになりたい)

九重を思いやる気持ちだが、榊の背中を押した。出口ではなく、下り階段へと歩を進めたのだ。

階段を下りると、むっとした湿気が榊を包み込んだ。埃っぽくて、黴臭^{かびくさ}くて、息苦しいほどだった。

しかし、踊り場までやって来ると、ほんのりとした明かりが陰鬱^{いんうつ}な

空気を拭い去ってくれた。

下り階段の終わりには、ほのかな明かりが灯ともっていた。

榊は足早に階段を下り切ると、深々と息を吐いた。まだ少し埃っぽかったが、死のにおいは薄まっていた。

半地下の廊下は、頼りない明かりがぼんやりと照らしていた。蛍光灯がジジッと呻うめき声を上げながら、最後の命を振り絞るかのようまたたに瞬またたいている。

隅すみずみ々に埃が溜すみずみまっているものの、あちらこちらに生活の痕跡うかがが窺うかがえた。

営業しているかしていないか分からない店と、薄汚れた看板が立ち並ぶ中、廊下のところどころに、古い洗濯機が置かれ、誰かの衣服やらが干されていた。

視界の隅で、何かが動いたような気がした。

ぎよっとして振り向くものの、視線の先にある扉がぱたんと音を立てて閉まっただけで、蠢うごめいたものの正体は分からなかった。

奇妙な場所だった。

生と死が混じり合った、曖味あいまいな世界のように思えた。

九重は、こんなところで生活をしているのか。

「おこ」

「ひゃい!!」

声を掛けられた榊は、驚きのあまり妙な声をあげてしまう。

恐る恐る顔を向けると、そこには見覚えがある青年がいた。稲穂色いなほの髪をした、生命力にあふれた若者だ。

「ジャンク屋さん……!」

九重の知り合いにして、この半地下の住民だ。榊の身体にまとわりついていた死の気配は、彼の登場によって一気に吹き飛ばされた。

榊は胸を撫なで下ろしたが、ジャンク屋と称する青年は怪訝けげんな顔をしていた。

「どこの命知らずが迷い込んだのかと思ったが、お前か。確か、不動産屋の——」

「榊です」

「そう、榊。でも、ここでは不動産屋と呼ばせてもらうぜ」

ジャンク屋は辺りをぐるりと見回すと、意を決したように踵を返した。

「僕、九重さ——呪術屋さんに会いたくて……」

榊もまた、ジャンク屋ならに做なって言い換える。その様子に、ジャンク屋は深く頷うなずいた。

「あいつに会いに来たなんて、一目瞭然いちもくりょうぜんだしな。ここで立ち話もアレだし、こっちで話そうか」

「は、はい」

ジャンク屋は柵を誘導する。彼は脇目も振らず、廊下をずんずんと突き進んだ。

途中、うつむいてしゃがみ込んでいる人がいたが、前を通り過ぎても微動だにしなかった。生きているのか死んでいるのかも分からないし、こちらの様子を静かに窺っているのか眠っているのかも分からなかった。

「なんか、不思議なところですね……」

「そう感じるのが幸せだと思え」

背中を見せたままのジャンク屋は、にべもなく言った。

「それって、どういう……」

「そのままの意味さ。ここが心地よさそうだと思う連中は、大抵、どこか病^やんでいる。それで、浮世から切り離されたようなこの場所に、だらだらと住み続けちゃうのさ」

九重もまた、その中の一人なんだろうか。

しかし、それよりも、目の前の青年がやけに自嘲^{じちやう}気味なのが気になつた。

「ジャンク屋さんも……?」

ジャンク屋は答えずに、右手をひらりと振ってみせただけだった。恐らく肯定しているのだろうと、柵は思った。

廊下の奥に、看板を出していない扉がポツンとあつた。柵はその

扉に見覚えがある。九重の事務所の扉だ。

「おい、呪術屋！ お前の知り合いの不動産屋が来たぞ！」

ジャンク屋は乱暴に扉を叩いてみせるが、返って来るのは沈黙だけだった。

「やっぱりいないか」

「仕事でしようか」

「多分な。それ以外で外に出ることは、ほとんどないし」

ジャンク屋は肩を竦めた。榊の当ては、完全に外れてしまった。

「仕事以外であんまり外に出ないってことは、やっぱりこのビルに一通りのものが揃ってるっていう……」

榊は周囲をぐるりと見回す。コンビニの類は見当たらないが、食事処と思しき看板は窺えた。ただし、『仕込み中』と掠れた文字で書かれた札が下がり、店内からは人の気配がしないが。

「まあ、揃っていなくもないってところだな。だが、半地下の住民にとつて、外の光は眩しいっていうのが一番の原因だ」

ジャンク屋の店は、九重の事務所の隣にあった。

外に面してカウンターが設けられていて、その奥に商品が置かれているようだった。カウンターは金網で守られており、商品は受け渡し口から渡すようだ。

「海外のガンショップみたいですね……」

「ん？ 海外に行ったことがあるのか？」

「いや、ゲームで見ただけですけど。ここ、物騒ぶつそうなんですか？」

「それなりに」

何ということもない風に答えるジャンク屋に、柵は震える。

ジャンク屋はひび割れた壁にはめ込まれた鉄の扉を開くと、柵を中へと促す。オイルと錆さびの臭いが鼻を掠かすめたが、不思議と不快さはなく、むしろ、生活の営みを感じられて安心した。

「客を招くなんて久しぶりだからな。炭酸飲料しかないけどいいか？」

「い、いえ、お構いなく……」

ジャンク屋というだけあって、店内は廃品だったと思しき物で溢あふれ返っていた。古びたガラクタだらけだったが、どれも手入れをした後なのか一定の清潔感を漂ただよわせており、ジャンク屋が商品に対して誠実であることが窺うかがえた。

「ほらよ。座りな」

ジャンク屋は、店の隅にあつた丸椅子まるいすを柵すに薦すすめた。つぎはぎだらけなのは、彼が修繕しゅうぜんしたからなのだろうか。

工具が散らばるテーブルの上に、ジャンク屋はペットボトルから注いだ炭酸飲料がなみなみと入ったグラスを置いてくれた。柵は手にしていた菓子折りを渡そうとしたが、ジャンク屋は「それは呪術

屋に渡すものだろ？」と丁寧に断った。

「また、呪術屋——九重と何かあったのか？」

「まあ、何というか……。九重さんの過去の一端に、意図せずに触れてしまったというか」

榊は乾いて粘りつく口に、ジャンク屋が出してくれた炭酸飲料を流し込む。フルーツの甘みとスパイスの刺激が絡み合い、不思議な味わいであった。しかし、炭酸の清涼感が、榊の胸に渦巻いていた陰鬱な空気を吹き飛ばしてくれる。

「あー、あいつの過去か……」

ジャンク屋は天井を仰いだ。あお

「ご存知なんですか？」

「それなりには。全部は知らん。教えてくれないし」

ジャンク屋は、ペットボトルに残された炭酸飲料をグイッと呷る。あお

「妹さんがいたみたいで……」

「すずめ」

「えっ」

「あいつの妹の名前だよ。多分、鈴芽って書くんだと思う」

ジャンク屋はそう言って、虚空に文字を書く。こくう

「どこですずめのことを？」

「八坂さんに会ったんです」

八坂の名を出した瞬間、ジャンク屋の顔が強張った。

「八坂或人」

ジャンク屋は、炭酸飲料をすっかり飲み干したペットボトルを乱暴に机に置いた。

「呪術屋の因縁の相手だ」

「そう……みたいですね。妹さんが亡くなった、原因のようで」

榊は遠回しにそう言ったが、ジャンク屋はその言葉の意味を汲んだようだった。

「呪術屋が呪術屋をやるきっかけとなった事件だな。まさか、お前から八坂の名前を聞くななんて思わなかったぜ」

「九重さんが、呪術屋になるきっかけに……？」

問い返す榊を、ジャンク屋は気まずそうに見つめていた。

彼はしばらくの間、眉間を揉んでいたが、やがて、決心したように口を開いた。

「俺が話したこと、呪術屋には言うな——いや、言っていないか。一切の苦情は俺が引き受けた方がいいな」

「そ、そこまで九重さんのプライベートにかかわるのなら、聞かなくても……!!」

榊は知りたくないわけではなかった。だが、九重の心の平穏の方が重要だ。

しかし、ジャンク屋は頭かぶりを振る。

「いいや、聞いておけ。お前は呪術屋を心配してこんなところまで来たんだろ？ その覚悟を、中途半端ないがしな気遣いで蔑ろないがしにしているのか？」

「中途半端って……」

「あいつは他人と壁を築きがちなんだ。だから、多少は土足で踏み込んだ方がいい。お前は俺と違って、一般社会に生きている光の世界の住民だ。お前の立場じゃないと出来ないことだってある」

「僕の立場じゃないと、出来ないこと……」

「それをお前に背負わせるのもまあ、気が引けるけどよ」

「いいえ」

気づいた時には、榊は身を乗り出していた。

「僕でないと出来ないことがあるなら、やらせてください。僕は、九重さんに苦しんで欲しくないのです」

榊の言葉に、ジャンク屋は歯を見せて笑った。

「それでこそ、光の世界の住民だ。いいじゃねえか」

「ひ、光の世界って、なんかむず痒がゆい表現ですね。僕よりも、ジャンク屋さんの方がよっぽど陽キャっぽいとか……」

陽キャというのは、陽の気を持つキャラクターというスラングだ。

主に、ジャンク屋のように明るくコミュニケーション能力がある人

物を指す。

「お前らの価値観の陰陽はよく分らんけど、お天道様てんとさまの光が眩しくない奴やつらは光の世界の住民だと俺は思うよ。俺達は、その光が辛くて地下もぐに潜もぐっちゃったし」

「俺『達』——」

「呪術屋もその一人ってことだ。地下に居過ぎると、地上の光が余計に眩しくて外に出られなくなっちゃう。呪術屋には、もつと外の世界に触れて欲しいんだ」

ジャンク屋から気遣いが伝わってくる。彼の言う外の世界とは、九重が自ら作った壁の向こうのことなのだろう。

「お前と接することで、あいつはかつて光の下で暮らしていた時の感覚を思い出しているんじゃないかと思う。一度、光の世界に背を向けた者が地上に戻るのには難しいかもしれないが、不可能なわけもないだろうし、背を向けるきっかけを減らすことは出来ると思いたいね」

「そのきっかけが、まさに、今回の一件なんですね」

「ああ。すずめと八坂のことだ」

ジャンク屋は、真まっ直ちぐな眼差まなざしで榊まを見つめる。彼がそんな真剣な顔をするのも、榊は納得出来た。

人の過去の傷に触れるというのは、その人が背負っている重荷の

一部を共に背負うということになる。その相手が大切であれば大切であるほど、背負うものは重たくなる。

九重の妹と、彼女を手にかけて八坂。太陽の下で普通の暮らしをして来た榊にとって、重たいものであることは間違いないかった。

しかし、それよりも、その重たいものをずっと抱えている九重の力になりたかった。

「……聞かせてください」

榊の覚悟は決まった。「よし」とジャンク屋は頷いた。

「俺は回りくどいのが嫌いだから単刀直入に言うが、八坂或人はすずめの想い人だった。二人は交際していたし、九重もそれを知っていた」

「へっ?」

何の前置きもなくそう教えられた榊は、思わず変な声をあげてしまった。

八坂と九重の妹が付き合っていて、九重の公認の仲だった。それなのに、八坂は想い人を殺し、九重がその相手を忌避きひしている。

「えっ、本当……ですか? いや、それが本当ならば、九重さんがあそこまで取り乱したのも納得がいくんですけど……」

「俺はその場にいたわけじゃないから、本当か嘘うそかは知らない。呪術屋本人がそう言ったんだ」

「それならきつと……本当ですな……」

九重がいたずらに嘘を吐かない人物だということは、榊にもよく分かっていた。

「どうして……すずめさんの想い人が、すずめさんを……」

「そこも分からん。呪術屋も分からないらしい。ただ、事実だけが残っている」

いわく、ある日、すずめは事故に遭って重傷を負ったという。それで、一命を取り留めたものの、全身に麻痺が残ってしまい、まとも意思疎通が出来なくなってしまった。

その矢先に、亡くなったそうだ。

「事故が原因で亡くなったわけじゃなくて……？」

「ああ。容態はかなり安定していて、亡くなるような状態じゃなかった。すずめの死は、あまりにも不自然だったらしい」

九重は、すずめのベッドの下から呪符を見つけた。九重は元々、民俗学に造詣が深くて呪術のことを知っていた。誰かがその呪符を使って、すずめに呪いを掛けたのは明らかであった。

「取り乱す呪術屋に、八坂はこう言ったらしい」

——すずめちゃんを呪ったのは僕だ。

「なっ……!!」

神は思わず息を呑んだ。

「実際、八坂がやった証拠がいくつか残ってたらしいな。本人が言うように、八坂がすずめを呪ったのに間違いないとのことだった」

「だから、九重さんはあんなに……」

「いや、それだけじゃない」

ジャンク屋は、彼にはおおよそ似つかわしくない忌々しい顔で言い放った。

「八坂はすずめを呪ったことを告白した時、笑っていたんだとさ」

「笑って……いた……?」

八坂は、あの春の日差しのように爽やかな笑みを浮かべながら、九重に残酷な言葉を吐きかけたのか。

「それから、九重は八坂と決別した。八坂と会ったら何をしでかさか分からないから、八坂に会わないように半地下へと逃げ込み、妹の墓標を胸に抱きながら呪術屋をやることにしたんだ」

そして、八坂もまた、九重の前から姿を消したという。

「俺は、あいつ自身のように苦しんでいる奴を救えと促したが、もしかしたら本当は、すずめのように呪われて命を落とす人間を減らしたいのかもしれないな。それがきつと、すずめへの手向けになると思つて。」

「そんなことがあったなんて……」

それなのに、九重は八坂と出会ってしまった。背を向けた過去と対面し、彼は苦しんでいたのだ。

「九重さんも、呪いを掛けられていたのか……」

「ん？」

ジャンク屋が首を傾げる。榊は怒りや悲しみが胸に込み上げてくるのを感じながらも、なんとか言葉を紡いだ。

「肉親はこの世で一番縁が強い人ですよ。その肉親が縁を通わせた相手に殺されるなんて……。これは、呪いとか言いようがないですよ」

「……そうだな。呪術屋が八坂に呪いを掛けられたというのは、言い得て妙だな。でも、あいつはあいつ自身にも呪いを掛けたと思っ
んだ」

「九重さんが、自分自身に……?」

「あいつは、自分が無力だからすずめが死んだと思ってる」

「そんなこと……」

九重は真摯な人物だ。きっと、すずめを助けるために全力で奔走した
ただろう。だが、だからこそ、全力を以てしても妹を助けられな
ったことを悔いているのかもしれない。

「あいつは罪悪感に苛まれてる。俺としては、この一件があいつ

の納得する形で決着がつくことを願っているよ」

「……僕も、そう思います」

九重がいつも、憂い^{うれ}に満ちた顔をしている理由が分かった。彼はことあるごとに、亡き妹のことを思い出しているのだろう。

それから、他愛ない話をぼつりぼつりと交わすと、榊は一礼をしてジャンク屋の店を後にした。

帰り際、榊は『差し入れです』というメモを添えて、九重の事務所^所のドアノブに菓子折りが入った紙袋を下げたのであった。

その日の夜、スマートフォンに九重からのメッセージが届いた。差し入れに対する簡単な礼であった。やはり、律義な人物だと榊は思った。

翌日、榊が出社すると、同僚が「お前の出社を待ってたぜ！」と熱烈歓迎してくれた。どうやら、マヨイガの物件でトラブルがあったらしい。

「トラブルって、やっぱり霊的な……」

「そうそう。心霊課の出番だと思ってさ」

「その部署名、連呼されると実在する部署になるかもしれないから……」

同僚のそれも、きっと呪いの一種だ。

実在しないものを実在するもののように扱い続けると、認知の中でそれが存在するようになる。

人が見ている世界は認知フィルターを挟んだものなので、認知の中で存在するものは実在に近い存在となるのだ。

「いつそのこと、作るか？」

かしわさき

柏崎がさりりと言った。

「これは、認知どころか本当に存在するものに……！」

せんりつ

榊は戦慄する。

「まあ、私の一存では無理だがな。まずは部長に掛け合ってみよう」

「いやいやいや！ 心霊課は要らなくないですか！」い っていうか、

柏崎さんが上司じゃないと嫌ですから！」

「私が兼任すればいい」

「う、うーん。それはありかも……！」

榊の心が揺れ動く。

「お前は呪いの件で活躍してくれているしな。いつそのこと、専任にした方がいいとすら思う」

「でも、呪われた物件がなくなったら、僕の仕事もなくなるような

……」

「呪いはなくなるのか？」

わしつか

柏崎の言葉に、榊は心臓を鷲掴みにされた気がした。

呪いがなくなる日は、来るのだろうか。

「創業者の一件が片付いた後も、呪われた物件が続々と見つかって
いるだろう」

「それは、呪術師の八坂さんが……」

「関わっているのが呪術師だろうと何だろうと、何もないところに
呪いは発生しないはずだ。火のない所に煙は立たぬというように、
呪いになる原因が存在しているから呪いが発生するんじゃない
か？」

柏崎の言葉は、あまりにも的を射ていた。

八坂が呪った相手は、いずれも自らに呪いを内包しているか、誰
かに呪われているかのどちらかであった。八坂はそれらに、実体を
与えたに過ぎなかった。

「お前の報告書を読んだが、呪術師や儀式はきっかけに過ぎないの
ではないかと思うよ。誰かが手を下さなくても、いずれは何らかの
トラブルになっていただろう」

「それは、その……」

榊も自らの認知を歪ませたり、他人に憎悪を抱いたりしたことによ
って呪いを発生させたことがある。榊は人を害するようなことは
したくないと思っではいるが、大切な人を守るためならば何をしで
かすか分からなかった。

「そんな中、呪術屋は、我々に理解出来ない術や儀式だけで解決しているわけではない。原因を調べて丁寧に取り除いている。そんな呪術屋の仕事を間近で見ているお前もまた、呪いが発生していそうなトラブルの対処方法を心得ていると思うんだ」

「柏崎さん……」

柏崎の瞳から、確かな信頼を感じる。榊は胸の奥が熱くなるのを感じた。

「僕、やります！ 心霊課を！」

「まあ、部署を作るか否かはもつと上と相談しなきゃならないが、しばらくは呪い関係に専念してもらおう。他の仕事は別の社員に回すようにするから」

榊の隣では、同僚が「任せとけ！」と力こぶを作っていた。他の社員もまた、温かい目で頷いてくれる。

柏崎の背中ばかり追っていた自分が、まさか皆からこんなに頼りにされるとは。榊の中でやる気が燃え上がる。

だが、それも数秒のことだった。

「いや、待てよ。ってことは、怖いトラブルは全部僕に集中するのは……」

「そういうこと。でも、お前はおばけ苦手じゃないだろ？」

同僚が、ぽんと肩を叩く。

「誰情報²」 苦手ですけど³」

「大丈夫だって。お前には最強の呪術屋がついてるじゃないか。式^{しき}神^{がみ}を使ったり五寸釘^{ごすんくぎ}で相手を倒したり、領域を展開したりするんだろ？」

「……それは多分、漫画の話だから」

目をキラキラさせる同僚の視線をやんわりと遮^{おさえ}りながら、神は連絡があつたトラブルの話に耳を傾けたのであつた。

霊にストーカーされている。

そんな相談を持ち込んだのは、マヨイガが管理しているマンションの一室に住む青年——渡辺^{わたなべ}だつた。オートロックがあり、セキュリティもしっかりしているのだが、常に自分にまとわりつく存在がいるという。

お祓^{はら}いをしてもらったが効果がなく、ネットで見つけた霊媒師^{れいばいし}に来てもらつても埒^{らち}が明かず、藁^{わら}にもすがる思いで連絡してきたという。

「お祓^{はら}いも霊媒師も歯が立たないって、かなり強力な呪いかもしれませんね」

件のマンションの前で、神は九重に言った。

空はよく晴れていて、真昼の日差しが降り注いでいる。心霊現象

とは無縁なほど、穏やかな日だった。

ただし、雲一つない青空はやけに渴かわいていて、見上げる度に奇妙な虚むなしさを覚えるほどであったが。

九重はマンションの外観をつぶさに眺めながら、榊の言葉に答える。

「本人の認知によるところが大きい——かもしれないな。生者の呪いは、場合によっては何よりも強力だ。お祓いや霊媒師を頼ったとしても、本人の信頼度が低ければあまり意味がない」

「ダメもとでお願いしたり、胡散臭うさんくさいと思いつつながらだといいい結果が得られないって感じですかね」

「ああ。だが、依頼者の深層心理に根差した呪くつがえいを覆すほどの信頼というものは、なかなか得られるものではない」

「本人が慎重なごさならば尚更さらですね」

「それか、本人や物件以外に原因があるのか——」

九重の目が鋭くなるのを、榊は見逃さなかった。八坂の関与を疑っているのだろうか。

「そう言えば、君がくれたフクロウの姿をした最中もなかだが」

九重はマンションに歩を進めつつ、急に差し入れの話題へと移る。

「差し入れの件ですか？ あれ、池袋いけぶくろにある三原堂みはらどうさんの名物なんです。可愛かわいいですよね」

「ああ。上品な味わいで美味だった」

九重は深々と頷く。

「僕もお気に入りなんです。気に入ってもらえて良かった」

「そんな差し入れを用意したくらいだ。俺に何か話があったんだろ
う？」

九重の鋭い着眼点に、榊は思わず息を呑んだ。

「ま、まあ、それなりに……でも、お節介だったかなーなんて
反省しております……」

「ジャンク屋から、どこまで聞いた？」

「ひいん！」

話題から逃げようとする榊の退路を、九重が的確に塞ぐ。榊は観
念して、九重に事のあらましを伝えた。

「すずめのことを聞いたのか」

「……す、すいません」

「……………謝ることじゃない」

九重はそう言うものの、普段よりも長い沈黙が彼の本心を表して
いるように思えた。余計なことをしたな、と榊は項垂れる。

だが、九重は真っ直ぐ進路を眺めながら、淡々と続けた。

「自身の呪いで他者の呪いを解く時、決まって、すずめの死に顔が
フラッシュバックする」

「そうだったんですね……」

では、九重はあのお決まりの呪文を唱える時、常に痛みを感じていたことになる。冷静な表情の下で、そんな苦痛に耐えていたとは。

「あの時、俺は何よりも無力な自分を呪った。すずめにそんな結末を齎もたらしたのは、自分の責任だと感じた。だから、呪いを見つけて解ときほぐす力を得たのかもしれない。すずめのような結末を迎える人間が、二度と現れないようにと」

榊は九重の表情を盗み見る。彼は静かに前を見つめていたが、その目には憂いと決意がないまぜになっていた。

九重は、今でも妹の死を引きずっている。だが、その死因と思いき八坂ではなく、自分に呪いの矛先ほしを向けてしまった。八坂と対面した時に取り乱したのも、自らに対する激しい感情が抑えられなくなったからなのかもしれない。

一体、どこまでこの人は真面目まじめなのか。

「九重さんは、八坂さんを呪おうとは思わないんですか？」

気づいた時には、そんな言葉が口について出ていた。榊は慌てて口を噤つぶむものの、もう遅い。

だが、九重は静かに答えた。

「そんなこと、すずめは望んでいないだろう。彼女の認知の中の兄けがを穢けがしてはいけない。去った者が大切にしたものを守ることが、何

よりの弔とむらひいだと俺は思っている」

「九重さん……」

「それも、自身に科した呪いの一つかもしれないがな」

九重はわずかに口角を吊り上げる。

今、笑ったのだろうか。それにしたって、あまりにも悲しい自嘲の笑みだった。

「さて、俺のことはさておき。今は住民のトラブルを解決しなくては」

「そ、そうですね」

九重の表情は、いつもの沈着冷静なそれに戻っていた。榊も気持ちを引き締めて、マンションに入る。

「セキュリティ会社によると、防犯カメラには何も映ってなかったそうです」

マンションのエントランスは、ほのかに外界の光が差して明るかった。大理石調の床は太陽光を反射し、エントランス全体を優しく包み込んでいる。

「うーん。おばけ、出ますかね？」

「霊の類が出そうにもないとここに出たということは、雰囲気にてられて霊を見たわけではなさそうだな」

「あつ、成程。なるほど確かに……」

廃墟のようなマンションであれば、多くの人が「霊が出そう」と認識し、認知の歪みによって枯れ尾花でも霊に見えるだろう。しかし、榊達が今いるマンションは、枯れ尾花は枯れ尾花にしか見えな
いほど、良い雰囲気だった。

榊は監視カメラがエントランスを睨みつけているのを確認しつつ、オートロックを解除して一階の廊下へと足を踏み入れる。すぐそばにエレベーターホールがあるが、清掃は行き届いていないし照明は明るく、どこにも陰鬱さは感じられない。

榊は首を傾げながら、九重は注意深く周囲を見回しながら、すぐにやって来たエレベーターに乗り込んだ。

「うむむ。今まで来た物件の中で、最も感じがいいんだけどな」

「先入観がないのはいいことだ」

腕を組んで首を傾げる榊の隣で、九重はエレベーター内をぐるりと見回す。

榊もまた、エレベーター内に監視カメラが目光らせているのを確認した。そこにも、霊は映っていないかったという。

榊はぼんやりと、エレベーターパネルが現在の階層をデジタル表示で教えてくれるのを眺めていた。

依頼人である渡辺の住居は、最上階の十二階だ。エレベーターは優雅に、八、九、十と数字を刻んでいった——。

「あつ……」

榊は小さく声をあげた。

パネルには榊の呆けた顔と、九重の姿が映っていた。だが、その背後に、もう一つ人影があったのだ。

榊はすぐさま、九重のことを小突く。九重もまた気づいていたのか、静かに頷いた。

いる。

榊達は二人でエレベーターのカゴに乗ったのに、三人目がそこにいた。

榊は思わず、九重の上着の袖を掴む。九重は何も言わずに前だけを見ていた。

存在がやけに希薄で、そこに肉体が実在していないのは明らかであった。ショートボブヘアで、小柄な女性だった。ユニセックスなパンツスタイルで、ステレオタイプの幽霊とはかけ離れた印象だった。

その女性は、ずっとうつむいていた。目は虚ろだが、思い詰めたように顔を強張らせているようにも見えた。榊や九重など、眼中にないようだった。

やがて、エレベーターは十二階で停止する。

戸惑う榊であったが、九重はさっさと廊下に出てしまう。榊は慌

てて追おうとするが、その横を、幽霊の女性が通り過ぎていった。

「あつ、ちよつと」

榊が引き留めようとするものの、伸ばした手は九重に遮られた。

女性は小走りで廊下の奥へ向かおうとするが、やがて、廊下を穩やかに照らす光の中に消えてしまった。

「消えた……？ それとも、見えなくなったのかな……」

「彼女はあそこまで行けないだろうな」

九重はそう言って、女性が消えた場所へと足早に向かう。榊もともについて行くと、そこはなんと、渡辺の家の前だった。

「ストーカーだったら、ここでじっとしていそうですけど……」

「そうだな。基本的に、ああいう存在は招かれなければ入れない。だから、招かれようとしたり、招かれる者に便乗しようとする」

「じゃあ、まさか……!」

榊は慌てて背後を振り返り、肩や背中の上のものを払う仕草をする。だが、九重の言葉には続きがあった。

「彼女にはきつと、その意思がないのだろう」

「ストーカーじゃ……ない？」

「恐らく」

九重はそれ以上、語ろうとしなかった。彼の中で情報の整理が必要なんだろう。

榊は渡辺の家のインターホンを鳴らし、不動産屋だと伝える。すると、驚いた様子で青年が顔を出した。

「この時間に来るとは聞いてたんですが、まさか玄関前に直じかに来るとは……」

青年——渡辺は用心深く周囲を見渡しながら、いささか非難めいた口調で榊に言った。オートロック式のマンションは、マンションの入り口でまず訪問先を呼び出すのが通例だということを、榊は思いつく。

「も、申し訳御座いません。オートロックやエレベーターの状況を見ておきたかったので……」

「いや、こちらこそ。ちょっと神経質になっていて……」
「すいません、と渡辺は律義に謝った。

目の下にはクマがあり、眠れていないのがよく分かる。ストーカの霊とやらが気になって、眠りも浅くなっているのだろう。

「立ち話もなんですし、中へ」

渡辺はそう言うものの、明らかに霊を警戒しているようだった。彼の不安げな視線は、榊と九重の背後に向けられている。

榊は九重に目配せをし、九重は頷いた。二人は渡辺に従って家中に入るものの、玄関で大丈夫だと伝えた。

「それで、何か分かりましたか？」

渡辺は、半ば諦めた表情で二人に問う。霊障れいしょうに対して不動産屋
が出来ることは限られている。あまり期待していないのだろう。

単身者用の住まいのためか、玄関は狭い。靴は一人分しか見当た
らず、隅には盛り塩が添えられていた。取り替えたばかりなのか、
真っ白な塩は照明を受けてキラキラと輝いている。

榊は一瞬、これのせいで女性の霊が入れなかったのかもしれない
とも思ったが、すぐに打ち消した。そういう先入観が、呪いを生み
出すのだ。

「いくつか、質問をしてもかまわないか？」

九重が口を開く。渡辺は、黒衣の相手を胡乱うろんげな眼差しで見つめ
た。

「ええ、どうぞ……」

「件の霊くだんに会った。彼女は、生霊いきりょうだ」

「ええっ」

榊と渡辺の声が重なる。

「生霊いきりょうって、生きている人間が霊になるっていうやつですよ……」

榊の言葉に、「ああ」と九重は頷いた。

すると、渡辺はがっくりと膝ひざをつく。自らの身体を抱き、恐怖に
震え始めた。

「じゃあ、俺を追って来たのか……。遠く離れたところに引越し

たのに……」

「心当たりがあるようだな」

九重の問いに、渡辺は項垂れるように頷いた。

「……俺は元々、西の方に住んでたんです。でも、転職で東京に引っ越すことになって……。その時に、悪縁も切れたと思ったのに……」

「悪縁だなんて、穏やかじゃないですね……」

眉をひそめる榊に、渡辺は悲しげに嗤った。それは、九重が先ほど一瞬だけ見せた自嘲の笑みによく似ていた。

「ちよつとしたコミュニティに入ってたんです。みんなでバーベキューをしたり、キャンプをしたり、仲間と一緒に他愛のない日常を楽しく過ごす、そんなコミュニティに。でもそこで、困ったことがあって」

「困ったこと？」

「ある女性に、想いを寄せられてしまって」

「こ、困ったこと……？」

いいじゃないか、と榊は思ってしまった。

今はやつれているものの、渡辺は間違いなくイケメンの部類に入る。イケメンだからモテて困るという話かと思っとうんざりしそうになったが、渡辺の心底くたびれた目を見ると、そう単純なことで

はないことが分かった。

その女性の名は、葛西かさいといった。

彼女はコミュニティの中でも目立つ存在だった。オシャレで可愛らしく、常に自分の意見を発信し続け、コミュニティを動かしていた。

しかし、渡辺の目には、葛西は他人の心を掌握するのたに長けているようにしか映らなかった。実際、彼女にチャホヤするのは男性ばかりで、女性からはそれとなく避けられていた。

彼女の我が儘わに、コミュニティの男達が動く。それに辟易へきえきしてか、コミュニティと疎遠そえんになる女性もいた。

だが、渡辺は我が儘を聞く男達を責められなかった。実際、葛西は愛嬌あいきょうがあり、彼女を喜ばせることで彼らが幸せになるのも分かるような気がしていた。

それでも、渡辺は彼女の取り巻きの一人になるつもりはなかった。他人を思いのままあやつに操る人間は好みではなかったし、彼は別の女性に想いを寄せていた。

葛西とは正反対の、地味だが爽やかで、理知的な女性だった。

彼女が同性であっても、きっと惹かれていただろう。彼女と話す時間を忘れ、彼女といると何よりも安らげた。もし、彼女と家庭

を持てるのならば幸せだろうと思うこともあった。

だが、そんな思いの丈を告げられないまま、悲劇が起きた。

「私い、渡辺君が好きなの」

皆でキャンプファイヤーを囲んだ時だったか。想い人は誰かという話題になり、葛西が甘ったるい声で告白したのは。

その場の空気が凍ったのを感じた。

男達は顔を引きつらせ、濁った目を渡辺に向ける。女性達は困惑しつつも取り繕おうとするかのように、曖昧な笑みを浮かべていた。

そんな中、葛西は熱っぽい眼差しを渡辺に向けていた。それは、想い人に向ける眼差しではない。「あなたがすべき行動は分かるわよね」という強迫に近い視線だった。

渡辺は答えに窮する。助け舟を求めるように、想い人の方へと視線を向けようとしたその時、取り巻きの男の一人が言った。

「おめでどう！」

彼の一言を皮切りに、男達は立ち上がって拍手をし始めた。

「そうか、渡辺のことが好きだったんだね。好きな相手に想いを伝えられてえらい！」

「ちよっと寂しいけど、君が幸せならオッケーだよ！」

葛西の背後から、祝福と喝采の嵐が、渡辺に押し寄せる。

異様な雰囲気だった。女性達は顔を見合わせ、まばらな拍手を始

めた。葛西は、「みんなありがとう！」と涙を滲ませながら喜んだ。
渡辺の返答なんて、誰も待っていなかった。渡辺の気持ちなんて、誰も汲んでくれなかった。

祝福というのは、こんなに押しつけがましくて恐ろしいものなのか。

男達のポジティブな言動の裏には、羨望と嫉妬がありありと感じられた。彼らは負の感情を誤魔化すために、『推しを応援する大人な自分』に酔っているのだ。そうでないと、負の感情に呑み込まれてしまうから。

その結果、渡辺は欲しくもない祝福を受けていた。

こんなの、呪いじゃないか。

これでは、渡辺は断れない。断ってしまったら、きっと葛西は泣き出すだろう。そうすれば、その場の雰囲気^{そじ}が損なわれてコミュニケーションが壊れてしまう。

そうならないためにも、葛西劇場の筋書きに従わなくてはいけない。
い。

だが、自分の気持ちに嘘はつけなかった。「そ、そうだったんだ」と曖昧に笑ってかわした。

それでも、肯定的に受け取られたらしい。「これからは二人を応援するぜ！」と男達は盛り上がった。

渡辺は動揺しつつ、想い人の方を盗み見る。すると、彼女もまた、他の女性達と同じように曖昧な笑みを浮かべてまばらな拍手をしていた。

渡辺は、そこで彼女の心が自分から離れてしまったと確信した。コミュニティにいる理由がなくなり、東京の会社に転職し、葛西を含むコミュニティのメンバーのSNSアカウントをブロックして引越した。

だが、ただ一人、想い人のアカウントだけはどうしてもブロック出来なかった。

全て話し終わると、渡辺は両手で自らの顔を覆う。

「馬鹿みたいな話でしょう。俺は何もかもから逃げ出してしまった。葛西さんになんて、ちゃんと断ればよかったのに。こんな曖昧なことをして……。結局のところ、俺も彼らと変わらないんです。他人の顔色ばかり窺う臆病者だから、遠く離れた地でも葛西さんに追われている……。それに、本当にそばに居たかった人も自ら手放してしまった……」

渡辺いわく、想い人からは一度も連絡が来ていないという。失望されてしまったのだろうと渡辺は言った。

「ふむ、成程な……」

九重は相槌あいづちを打つものの、納得していないように眉をひそめていた。

「では、生霊が葛西という人物のものだと仮定して、君は彼女をどうしたい」

「出来れば、祓はらって欲しいです。もう関わりたくないですし。でも、曖昧にってしまった俺にも責任があります。彼女と向き合えるなら、ちゃんと想いを伝えたいんです」

すなわち、恋慕れんぼの情こたに応えられないときっぱり伝えたいのだろう。「エレベーターに乗る度たびに、彼女の長い髪が俺にまとわりつく感じがするんです。彼女がよく穿はいていたロングスカートが、視界の隅にチラつく気がして——」

「えっ、待ってください」

榊は思わず声をあげた。渡辺は不思議そうに顔を上げる。

「僕達が見たのって、髪が短いパンツスタイルの女性でしたよね？」
榊が九重に確認すると、「ああ」と九重は頷いた。

「短髪で、パンツスタイル……？」

渡辺は、信じられないようなものを見る目で、二人を見つめた。

「まあ、短髪っていつでも、ベリーショートとかじゃないですけど」「もしかして、ショートボブですか？」

「そう、そうです」

榊が頷くと、渡辺は目を見開き、スマートフォンを取り出す。彼は何度も画面をフリックし、スマートフォンを落としそうになりながらも一枚の画像を榊と九重に見せた。

「もしかして、こんな女性でしたか？」

映っていたのは、ショートボブでユニセクスのな服装の、小柄で爽やかな女性だった。画像の快活な表情と、エレベーターで見た思い詰めた表情は天と地ほどの差があつたが、間違いなく同一人物だった。

「そうです！ この人です！」

「そんな……。彼女は、俺の想い人です……」

渡辺と榊は、お互いに信じられないような目で見つめ合う。その間に割って入るように、九重が口を開いた。

「君は、エレベーターで件の女性をハッキリと見たことは？」

「お恥ずかしながら……。直視出来ずにいました。女性がいるという気配だけは感じていたんですが……」

「あの、渡辺さん。差し支えがなかったら、葛西さんのSNSのアカウントを教えてください。僕が彼女の現状を確認してみるの……」

榊の申し出に、渡辺は言われるままに葛西のアカウントを教える。榊は自分のスマートフォンで彼女のアカウントを見つけ、「おおぅ……」と呻いた。

「な、何か……」

渡辺は、恐る恐る尋ねる。最悪の事態を想定しているのだろう。

「彼女は今、コミュニティのリーダーになってるみたいですね。大勢の人に囲まれて、めっちゃうくちゃ楽しそうな写真を撮ってます」

「へ？」

渡辺は目を丸くした。榊がスマートフォンを手渡すと、促されるままに画面を見やる。

「ほ、本当だ。メンバーはかなり入れ替わってるけど、充実した顔をしてる……」

過去の投稿にさかのぼると、彼女はちやっかり彼氏を作っていることが判明した。今は同棲どうせいしているようで、自分達を可愛らしく加工した写真をアップしていた。

渡辺への未練は、皆無で、とても生霊を飛ばしてストーカーしているようには見えない。

「君は、葛西という人物について、罪悪感も抱いていたのだろう。だからこそ、彼女に違いないと自らに呪いを掛けていたんだ」

「じゃあ、俺のそばにいたのは——」

渡辺が口を開いたその時、ドンドンと扉をノックする音がした。

次いで、インターホンの呼出音が室内に鋭く響く。

「ひっ」

渡辺は身を竦める。頭では分かっている、心に刻まれた恐怖は簡単に消えない。

「大丈夫です、渡辺さん。扉の向こうにいる人は、葛西さんじゃないです！」

榊は覗き穴から外を見て、ドアノブに手を掛ける。

「でも、俺が想い続けていたあの人が、俺のところに来るなんて思えない……！ 連絡も来ないし、きっと俺は見捨てられて——」

「榊、扉を開ける！」

九重はそう叫ぶと、印を結ぶ。

「急急如律令。我が呪いにより解ほどけよ！」

九重が渡辺の呪いを解いたのと、榊が扉を開けたのは同時だった。

さあっと明るい日差しとともに、爽やかな風が玄関に入り込む。

外界の光を背に立っていたのは、ショートボブの女性だった。

「晴陽……！！」

それは、渡辺の想い人の名だった。

渡辺はふらつきながらも身を起こし、よろめきながら彼女に歩み寄る。

『ずっと、キミに会いたかった……！！』

晴陽の生霊は破顔したかと思うと、渡辺に飛び込もうとする。渡

辺は両腕を拡げて、彼女を受け止めようとした。

柔らかな日差しの中、彼女は渡辺の胸にすうっと溶け込む。それつきり、彼女は消え、そよ風が渡辺の前髪を優しく撫でていた。

渡辺の頬を、一筋の涙が伝う。

彼は、震える唇でこう言った。

「好きだったのは俺だけじゃなかった……。彼女も俺と同じで、ずっと本当の気持ちを表せなかったんだ……」

渡辺はくずおれ、すすり泣き始める。

彼の涙が玄関を濡らしたが、それは陽光を受けて輝き、彼らの未来を照らしているかのようだった。

その後、渡辺は榊と九重に何度も礼を告げ、晴陽と連絡を取ることを決意した。

また同じような現象に悩まされたら連絡して欲しいと榊は言ったが、女性の生霊は二度と出ないだろうと確信していた。

「今回は、本当に解決して良かったですね。想いがすれ違ったままというのは悲しいですし」

榊は心底安堵した。解決した先に、幸福な未来が予感出来るから。

「でも、晴陽さんも凄いですよ。生霊を飛ばせるくらい想いが強いなんて」

「……あの生霊、知っている気配を感じた」

「え……?」

榊は首を傾げながら、オートロックの自動ドアを抜けエントランスへと向かう。そこで、何者かが佇たまたんでいるのに気づいた。

九重が立ち止まり、その人物をねめつける。

穏やかな光の下で、春めいた髪色の青年が佇たまたんでいた。

「八坂さん……どうしてここに……」

「それはこちらの台詞せりふだよ。尤もつとも、庵いおりさんと君が問題を解決してくれたようだけど」

「問題って……」

二人が解決した問題なんて、一つしかない。

「まさか、晴陽さんの生霊に関わっていたんですか……?」

九重の知っている気配というのは、八坂の呪いの気配のことだったのか。八坂は、肯定するように微笑ほほえんだ。

「お前は彼女に手を貸した。だから、一介の人間が強い執念を飛ばし、生霊になれたんだ」

九重は八坂をねめつける。だが、八坂は笑顔を保ったままだった。

「流石さすがは庵さん。お察しの通り、僕は彼女に力を貸したんだ。彼女は、片想いをしていた相手に気持ちを伝えられず、傷ついていたからね」

晴陽もまた、渡辺のことを好ましく思っていたという。だが、葛

西とその取り巻きの威圧感にお圧され、あの場は祝福するしかなかったそうだ。

彼女はずっと、そのことを悩んでいた。自分に素直になれなかったことを悔やみ、その罪悪感から連絡が取れないでいたのだ。

「言葉では気持ち伝えるのが難しい。一つの言葉でも、相手の捉えとら方によって意味が変化してしまう。どうにかして、素直な気持ちを伝えたい。心を彼のもとに飛ばせればいいのに——というのが彼女の願いさ」

「だが、相手は自らに呪いを掛けていたため、真実に気づくことは出来ず、彼女の願いを受け止められなかった……」

九重が続きを紡ぐと、八坂は破顔した。

「その通りだよ。どうやって彼と接触しようか悩んでいたところを、庵さんと榊君が解決してくれたわけさ。二人は想いが通じ合ってハッピーエンド。二つの痛みが取り除かれたようで良かった」

榊は、八坂の表情を注意深く観察する。彼の口から語られるのは真実のように見えたし、彼の笑みは心からの喜びを表しているようだった。

だからこそ、榊は分からなくなる。

恐ろしい呪いをかけて回った相手なのに、今の彼から感じられるのは絶対的な善性だった。

「晴陽さんを生霊にしたのも、八坂さんの呪いなんですよね……？」
「そう。彼女の想い人に対する執念しゅうねんを増幅させたのさ。想い人と接触するのに二の足を踏んでいたようだから、背中を押したんだよ」

八坂はあっけらかんとした表情だった。

「でも、呪いは一步間違えれば人の命を奪いかねないのに……」

「彼女は、想い人を傷つけないという強い意思を持っていたからね。実際、想い人に危害を加えてないだろう？」

それは間違いなかった。彼女は渡辺が心を開きかけるまで、扉の前で消えるほどの慎ましやかさつとを持っていた。

「……彼女は無事なのか？」

九重が問う。すると、八坂は軽く肩を竦めた。

「生霊を飛ばすくらいだから、多少の衰弱はしているけど、命に別条はないはずだよ」

榊は九重に目配せをする。晴陽に何かあったとしたら、渡辺が榊に連絡をくれるはずだ。

「信用ないな。呪術師の家系という出自しゅつじで悩むこともあったけど、庵さんが力の使い方や前向きな考え方を教えてくれたし、今はそれを最大限に活かしているつもりだよ」

八坂の言葉に、九重の眉間の皺しわが深くなる。九重からぴりりと感じる怒気に、榊は息を呑んだ。

八坂からは、九重に対する尊敬の念が伝わってくる。

それなのに、どうして――。

「どうして……」

「ん？」

榊は口から漏れた疑問を、呑み込むことが出来なかった。

「どうして、すずめさんを殺したんですか？」

その場の空気が、しんと静まり返る。

太陽はいつの間にか、薄雲の中に身を隠していた。少し冷たくなつた風はエントランスに入り込み、オートロックの扉に阻まれて戸惑うように渦巻いた。

「どうしてって、簡単なことさ」

八坂は、先ほどまで地上を照らしていた陽光と変わらぬような瞳を、二人に向ける。

「彼女が死を望んでいたからだよ」

「……っ！」

榊は言葉を失う。九重もまた、目を見開いて八坂を凝視ぎやうししていた。「彼女は家族や身近な人に迷惑をかけることに、負い目を感じていた。だから、僕に全てを終わらせるように頼んだのさ」

「そんなこと……」

九重は明らかに動揺していた。その証拠に、それ以上、言葉を紡

げなかつた。

だが、八坂は二人に構うことなく、「じゃあ、僕の仕事は終わったから」と踵を返して去って行く。

雲はいつの間にか厚くなり、空を灰色に染め上げていた。

(了)